

イギリス文学に於ける〈窓〉

——その翻訳と文化的背景——

三 谷 康 之

序

外国文学を読む場合に、文化・風土の上の違いから、彼の国には存在しても此の国には無いものを表す言葉に出会って、その訳出に窮することは避け得べくもないが、彼此の風土・文化の相違に起因する故に、誤読・誤訳を招来し兼ねないというのもまた事実である。例えば西洋建築のことがある。その中の一端の要素として〈窓〉の問題がある。一体に、近代以降の我国の作家は、建築に払う関心が比較的稀薄なのではないかと思われる所がある。作品の中に登場する〈窓〉は常に〈窓〉である。大小や明暗の修飾語は冠せられるものの、特別に建築美学的観点から留意されて描写されることが少ない。その理由の分析は別段の論に言及されるべきであるが、他方、外国文学では種々様々な〈窓〉が指摘され、表現される。20種や30種では仲々済まない数になって扱われているのである。しかし、元来我国には無いもの故、その正鵠を得た意味の伝達の点に関しては暫く置くとしても、大半は翻訳上、英和辞典などに依存して訳語を当て嵌めることは不可能ではない。例えば、‘eyebrow dormer’は〈眉形屋根窓〉、‘bull’s eye window’は〈牛の目窓〉といった工合である。与えられた訳語のみでは、彼等英国人が抱いているイメージと同然のものが、読者の眼前に彷彿とは無論行く道理がないが、誤訳にはなり得まい。問題は寧ろ、西洋の窓建築の背景となる事情が、我国の場合と異なる所があるために起こる意味の取り違いの方であろう。以下に、我国に於て最も誤解の生じ易い〈窓〉に関する表現を取り上げて、考察を試みた次第である。

(一) ‘long window’ に関して

‘long’の形容詞の項を英英辞典に見るに、ロングマンの『ニュー・ユニバーサル辞典』では、‘having greater length or height than usual’、『ウェブスター辞典』(第三版)によると、‘tall’に同義とあって、‘having greater height than usual’及び‘enlongated’に同義とされて、‘having a greater length than breadth’となる。後者の場合にはそれぞれに‘the long French windows’と‘a long face’の用例が添えてある。『ランダム・ハウス英語辞典』にも‘being

higher or taller than usual' とあって、同然の語義の説明がなされてある。詰まり、西洋の窓に 'long' が冠せられると、横幅よりも縦の方に長い形の窓、結局は〈縦長の窓〉を意味することになるが、特に尋常以上に縦の長さが大の場合を指すと考えて良い。この形態の窓が実際に文学作品に於いて如何に用いられ、我国では何と訳出されているかを吟味するに、

But all was new and surprising to me on that day—the long windows with little panes, the pillars, the pews made of oak, the little hassocks for the people to kneel on, the form of the pulpit, with the sounding-board over it, gracefully carved in flower-work.

—C. Lamb : *Mrs. Leicester's School*, 'First Going to Church'

でも、そのときには、なにもかもめずらしく、すべてがおどろきのたねでした。小さな窓ガラスをいっぱいにはめた長い窓、立ちならぶ柱、カシの木でできた腰かけ、お祈りをするときに使う小さなひざぶとん、上のほうにひびき板のある、美しい花もようをきざんだ教壇、その一つ一つが、めずらしくて、ただおどろくばかりでした。

(『レスター先生の学校』岩波書店 昭和27年)

The streets were thronged with working-people. The hum of labour resounded from every house, lights gleamed from the long casement windows in the attic stories, and the whirl of wheels and noise of machinery shook the trembling walls.

—C. Dickens : *The Pickwick Papers*

街路は労働者たちに満ちあふれていた。作業の音はすべての家々から反響し、屋根裏部屋の長方形の窓々から燈火がきらめき、輪轉する車輪や機械の轟音は四壁を揺り震わせていた。

(『ピクウィック倶楽部』三笠書房 昭和26年)

前者の 'the long windows' は〈長い窓〉、後者の 'the long casement windows' は〈長方形の窓々〉と訳されてある訳だけが、我国の文化的背景の下では、この日本語からは、いずれにせよ〈横長の窓〉の方が寧ろ連想されて自然なのではあるまいか。例えば、一般家屋の窓は無論のこと、新幹線列車の窓の様に、外景は存分に取り入れる目的で横幅の広くされた 'picture window' (絵窓) の様な形を脳裡に思い浮かべて読まれる恐れも生ずるであろう。後者の 'casement' あるいは 'casement window' と呼ばれる窓は、蝶番で固定され、押したり引いたりして開閉される〈開き窓〉を指し、真中から左右に開く観音開き式のもので一般である。16世紀末葉までには多く用いられるようになったが、やがて後述する 'sash window' (上げ下げ窓) に取って代られ、後にゴシック様式復興時代(18世紀後半~19世紀)及び20世紀初頭には好まれて復活を見ることになったのであるが、この窓自体がそもそも〈縦長〉になるのが通例なのである。また、'long window' は次の作品では 'long-shaped window' と使われてはいるが、18世紀初頭のアン王朝の

建築様式に言及されているので、同じ形状のものを指すと解して良いものである。

It was a great white place with colonnades and long-shaped windows, which had been built, I suppose, about Queen Anne's time by someone who'd travelled in Italy.

—G. Orwell : *Coming Up for Air*

もっとも、同じ 'long' でも、'longhouse' となると次元が異なって、これは反対に〈横長の家〉になるのである。元来はスカンディナヴィアからの侵入者によって、9世紀までにはスコットランド北部に導入されたと考えられる石造りの家屋で、以後、様々な発展を経て他の地方にまで広まったもので、現今でもデヴォン州のダートムーアの地方などには見られる掬えである。機能上は我国の東北地方の〈曲屋〉を思わせる所があって、人間が家畜と居住を共にする、低くて横に長い耐風性の掬えの農家を意味することになって、'long' の語法もいささか厄介でもある。J. ゴールズワージーの短編『りんごの木』は上記ダートムーアの高原を背景にして描かれた作品であるが、その 'longhouse' の造りになると思われる農家が舞台となる。

Descending past the narrow wood, they came on the farm suddenly—a long, low, stone-built dwelling with casement windows, in a farmyard where pigs and fowls and an old mare were straying.

—J. Galsworthy : *The Apple-Tree*

今一つ、〈横長〉の意味の語法に関して引例するに、ヒュー・ブラウンの建築史に関する著書『要約英国建築史』の中では、上述の 'picture window' に同義の 'landscape window' (景色窓) に関して、'wide' の語を用いて横幅に言及した上で、'long low windows' と説明している点から見ても、〈横長〉を表わす時は 'low' と共に使われるのが通例とって良い。

As they were now using reinforced concrete 'lintels' over their windows, instead of brick arches or wooden beams, they could make their windows very much wider; so the old upright Georgian windows began to give place to long low windows called 'landscape windows'.

—H. Braun : *A Short History of English Architecture*

(二) 'tall window' に関して

(一)の 'long' の語義の説明にも示される様に、'tall' に同義とされるが、A. S. ホーンビィの『現代英英辞典』の 'tall' の項を引くと、'(of objects such as a ship's mast, a flagpole, a church

spire, a tree whose height is greater than its width, but not of mountains) higher than the average or than surrounding objects.’ とある。即ち, ‘tall’ を窓の形容詞として見た場合, ‘long window’ に同然に, 家屋の拵え全体の寸法に鑑みて, <縦長の細長い窓> を表わすことになるのであるが, これについても次の様な例がある。

An elegant, shabby, white-washed house
 With a slate roof. Two rows
 Of tall sash windows. Below the porch, at the foot of
 The steps, my father, posed
 In his pony trap and round clerical hat.
 This is all the the photograph shows.

—C. Day Lewis : ‘The House where I was born’, 1-6

優雅だが古びた水しっくい塗った家,
 スレート屋根. 二列の
 高い窓. ポーチの下
 階段の下で父はポーズをとっている.
 馬車の中で丸い牧師の帽子をかぶって.
 写真が見せてくれるのはこれだけだ.

(『ユニコーン英語読本教授資料』「第3巻」文英堂 昭和58年)

‘sash window’ というのは, 二枚から成る窓枠を上げ下げして開閉する窓で, 滑車とコードと平衡錘が利用されている。オレンヂ公ウィリアム (1689—1702) が英国王となった時に, 共に連れて来たオランダ人達が, それまでの ‘casement window’ に代わるものとして, オランダ式のこの窓を導入したのである。嵌め込まれた窓枠が溝を滑めらかに上下するように, それまでの鉄製から木製へ代わり, 中の棧も ‘came’ という鉛のそれから ‘glazing bar’ という木造のものに



(1) tall sash window



(2) long casement window

なった。二枚の枠の内、上部を 'the upper sash', 下部を 'the lower sash' というが、初期の頃は上部は固定され、下部のみが上げ下げ可能であったのである。従って、'tall sash window' はやはり〈縦長の上げ下げ窓〉であって、'sash window' の形式がたとえ我国に馴染まないとの理由で単に〈窓〉とするにしても、〈縦長の窓〉にならなければ誤読を来すことは否定出来まい。日本語の〈高い窓〉は、窓自体の丈の高さよりは寧ろ〈高い位置にある窓〉を指すことになるのが一般であるからである。次の例も誤解は少なくなるかも知れぬが、果してどうであろうか。

Opposite to the arch was another door, which the serving-man in like manner unlocked, and thus introduced them into a stone-paved parlour, where there was but little furniture, and that of the rudest and most ancient fashion. The windows were tall and ample, reaching almost to the roof of the room, which was Composed of black oak....

—W. Scott: *Kenilworth*

拱門と相対して別の扉がある。召使の男は同じようにこの扉をあけて、石を敷きつめた客間にふたりを招ずる。客間には家具はきわめてすくなく、それもおよそ殺風景なおよそ古風な代物、窓は高く広く、ほとんど部屋の天井に達する。天井は黒い檜の板である。

(『ケニルワースの城』「世界文学全集6」集英社 昭和45年)

〈ほとんど部屋の天井に達する〉とあるために〈高い位置にある窓〉の連想を呼ぶこともなきにしもあらずであるが、'ample' とあるから横幅も十分あるが、やはりそれ以上に〈縦の長さ〉が大なる窓を読み取るべき所であろう。

(三) 'high window' に関して

(一)に於いて〈高い窓〉が問題とされたが、では、'high window' は如何なる窓を指し示す語であるのかというに、既に(一)及び(二)の語義の解釈中にも見られた様に、一定の位置から上へ高々と伸びる形で壁面に開口部を持つ窓で、結局は〈縦長の窓〉を意味するのが通例ということになる。下記の同一の詩に対して、二様の訳書を比較して見るに、

A casement high and triple-arch'd there was,
All garlanded with carven imag'ries
Of fruits, and flowers, and bunches of knot-grass,
And diamonded with panes of quaint device,
Innumerable of stains and splendid dyes,
As are the tiger-moth's deep-damask'd wings;

—J. Keats : 'The Eve of St. Agnes', XXIV.1-6

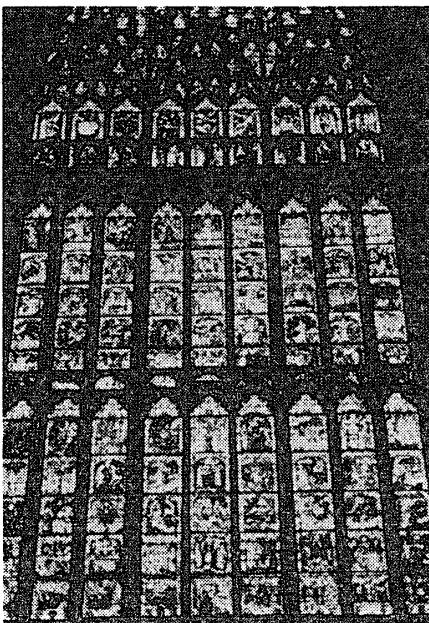
高い所に窓がありアーチが三重になっている
 どのアーチにも模様がある
 果実や花やミチャナギの房が浮き彫りにされ
 奇妙な趣向の窓ガラスだ
 色とりどりのすばらしい色模様の煌くさまは
 ヒトリ蛾の深紅の羽根のようだ

(『新訳キーツ詩集』彌生書房 昭和57年)

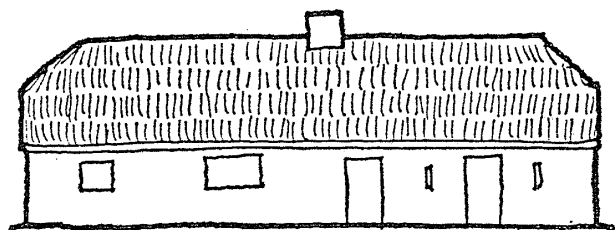
三重ねアーチ造りの高い窓が一つあって、
 縁一面を飾る彫刻のさまざまな形には
 果物に花々、またニワヤナギ草などの房模様、
 そして硝子は珍しい細工で菱形に張られ、
 無数の彩色をほどこして目もあやな色合いは、
 火取蛾の濃い色綾の羽のようだった。

(『世界名詩集』平凡社 昭和43年)

現実問題として、キーツのこの詩に登場するアーチ型の窓は、Stansted Chapel のそれがモデルとされるが、それは兎も角として、この場合の‘casement’は前述の様な〈開き窓〉ではなく、詩語として単なる‘window’の意味に用いられていると考えて良いが、その‘a casement high’の訳語のうち、後者も(二)で考察した通りになるが、特に前者の〈高い所の窓〉は明らかに〈高い位置に設けられた窓〉以外の他の意味にはなり得まい。その部屋が牢獄にはあらず、マディライン姫の私室(chamber)であることを考えると、不適であろう。『キーツ全詩集』(白鳳社 昭和52年)で当てられてある訳語の〈高窓〉も同然のことになるであろう。因に、教会建築で〈高窓〉といへば、‘clearstory window’ といっ、‘nave’ (身廊) と ‘aisle’ (側廊) とを仕切る壁の上部



(3) high window



(4) longhouse

に設けられた窓で、'aisle'の屋根より上に位置し、堂内の中央への採光を目的としたものの方を思い浮かべるのが通例であろう。

しかしながら、'high'には'Situated far above the ground or some base' (SOED)の意味、要するに、〈地面など基底から離れて高い位置にある〉の場合もあるのであって、詰まりは、'high window'には上に言及した〈高い位置に設けられた窓〉の意味もまたあるのである。次の例などは椅子ではなく、机を踏み台に利用しなければ届かない程の〈高い窓〉である。

At the side of the room were high windows of Ham-hill stone, upon either sill of which she could sit by first mounting a desk and using it as a foot-stool. At the evening advanced here she peached herself, as was her custom on such wet and gloomy occasions, put on a light shawl and bonnet, opened the window, and looked out at the rain.

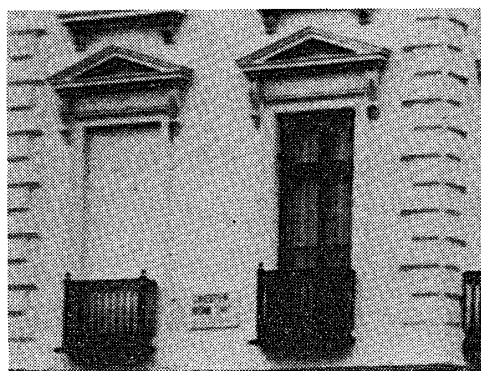
—T. Hardy: *Under the Greenwood Tree*

一般に西洋建築の窓の形態上の基本概念は、〈横長〉よりは〈縦長〉の窓の方にあるのは、建築の構造上、横幅の広い開口部を設けると、壁の拵えも弱くなることなどの理由もあった訳けであるが、下記に詳述する税の対象となる窓一つの容認される最大の寸法は、縦3.35 m、横1.45 mであったことを見ても分かるのである。特にその丈の高さ、縦の長さを強調する場合に、'long'、もしくは'tall'、もしくは'high'が冠せられるのである。

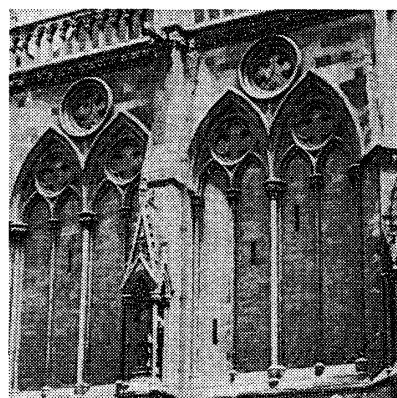
(四) 'blind window' に関して

西洋建築の窓には、一口に〈窓〉とはいっても、所謂開口部を持たないものがあるが、それは以下の四通りの場合に当たるのであるが、全て'blind window' (めくら窓) と呼ばれる。

- (イ) 特にゴシック建築に見られるが、広い外壁面に装飾として設けたもの。
- (ロ) façade (建物正面) にシンメトリーを重んじることから設けたもの。
- (ハ) 家屋の戸口に上から掛かる石組みの重圧を減少させる目的で、拵えたもの。



(5) blind window



(6) blind window

(=) 'glazed window' (ガラス入りの窓) が英国に取り入れられるのは一般にはエリザベス朝からで、それは極めて高価に付いたため、17世紀の末葉からは税金 (window-tax) の対象にもなり、取り付けられた窓の数が六つまでは無税であるが、それ以上は数によって税額が査定され、後に一部改制はされるものの、19世紀中葉まで行われており、現実には中流階級に最も荷の重いものとなっていて、このため、既存の窓を税の対象から外す目的で、塞ぎ潰してしまったもの。

(イ)~(ハ)は 'blank window' あるいは 'bogus window' あるいは 'false window' (にせ窓) とも呼ばれ、(ニ)は 'blocked window' (潰し窓) ともいわれる。例えば R.L. スティーブンスンのエッセイでは次の様に用いられてある。

Softly he clambered out of bed and up to a false window which looked upon another room, and there, by the glimmer of a thieves' lantern, was his good friend the Deacon in a mask.

—R.L. Steevenson: *Edinburgh*

今一つ翻訳と共に引例するに、

"I tell thee what, thou thin-faced gull," said Michael Lambourne, in high chafe, "I will wager thee fifty angels against the first five shelves of thy shop, numbering upward from the false light, with all that is on them, that I make Tony Foster come down to this public house, before we have finished three rounds."

—W. Scott: *Kenilworth*

「いいか、おいよくきけ、このうすっぺら野郎」マイクはひどくお冠で、「貴様の店の明りとり窓から上に数えて棚五段、その棚の品全部とおれのほうは金貨五十枚賭けてもいい、おれたちがあと三遍とは乾杯しねえうちにトウニー・フォスターをこの居酒屋によびつけてみせるわ」

(『ケニルワースの城』「世界文学全集6」集英社 昭和45年)

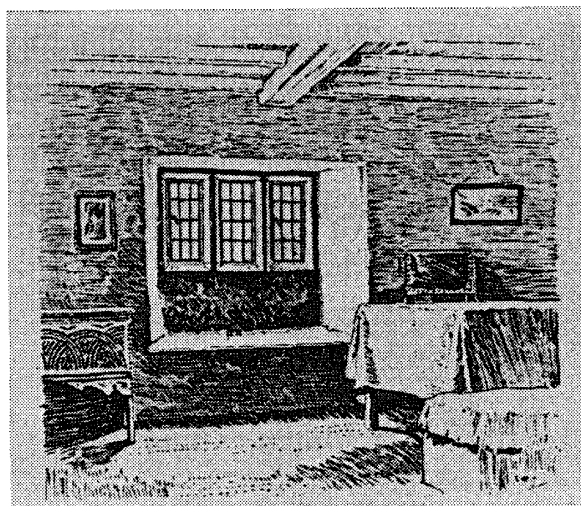
'false light' は上述の様に〈にせの明かり取り窓〉であって、〈明りとり窓〉ではないのであるが、'blind window' が往々にして誤読の対象の一つになるのは、我国には西洋建築に於ける程はこの造りが見られないせいであらうか。

(五) 'window-seat' に関して

我国の建築には先ず無いと思われる窓の造りで、それ故に誤訳の生じ易く、また、訳出に無理



(7) window-seats



(8) window-seat

を来し兼ねないものに 'window-seat' がある。中世の建築，特に manor house (荘園領主の館) の solar (領主及びその家族の私室) やあるいは城の中で，大きな造りの窓が備えてある場合，丁度，今日でいう列車の窓際の座席の様に，向き合って二人座れる程の席が，部屋の内側で窓に面して設けられてあったが，それを指すのである。窓の外側より内側の方が大きい，あるいは，広い造りとなっている 'splay' (朝顔形) の造りを 'embrasure' というが，この窓にもこの造りが見られる。そこに腰を下ろして，読書や針仕事などが可能であったのである。窓の内側には木製の雨戸，外側には鉄製の格子が嵌め込まれてあり，座席は石造りが通例である。こういう窓は 'window with window-seats' と呼ばれるが，その簡素な造りは一般農家にも見られるものである。以下にこの語の現れる作品とその翻訳とを比較するに，

But in the evenings he installed himself in the window seat in the kitchen, smoking and chatting with the lame man Jim, or Mrs. Narracombe, while the girl sewed, or moved about, clearing the supper things away.

—J. Galsworthy: *The Apple-Tree*

しかしいつも夕方になると，アシャーは台所へ行って出窓の下の椅子に腰をおろし，タバコをふかしながら，足の悪いジムやナラクーム夫人を相手によもやま話をした。そのあいだ，メガンは縫物をしたり，夕食の後片づけにあちこち動きまわっていた。

(『りんごの木』岩波書店 昭和63年)

翻訳者が，この窓を〈出窓〉と訳したのは当然のことで，農家のこういう窓はその造りが少なくなく，しかも，その窓の下には椅子，時には長椅子が置かれてあるのが通例であるからで，後

述するが、そういう〈椅子〉をも指して‘window-seat’とも確かにいう訳けで、この部分の文章のみでは、あなたがち誤訳ともいい切れないが、実はこの窓はこの作品の中では、ここに至るずっと前の下りで、次の様に描写されてあるのである。

Two other youths, oblique-eyed, dark-haired, rather sly-faced, like the two little boys, were talking together and lolling against the wall; and a short, elderly, clean-shaven man in corduroys, seated in the window, was conning a battered journal.

—*ibid*

先ほどのふたりの男の子と同じように、目がつりあがり、黒い髪で、ちょっとずるそうな顔をした若者がほかにふたり、何か話しあいながら壁に寄りかかっている。そしてもうひとり、コール天のズボンをはいた、背の低い、ひげのない年配の男が窓ぎわにすわって、くしゃくしゃになった雑誌を熱心に読んでいた。

(同上)

詰まり、二箇所の訳語から推して、訳者はこの語を〈窓ぎわに置かれる椅子〉の意味に解している様ではあるが、‘seated in the window’の表現から判断して、原作者は、上述の〈窓座〉の方を指しているのは明らかである。

また、上述の説明の中で言及した‘embrasure’は、‘embrasured window’あるいは‘embrasure of the window’として、拵えによっては‘window-seat’と同然の用途を持つこともあって、次の様な表現の中に伺うことが出来る。

When he saw Freddy Malins coming across the room to visit his mother Gabriel left the chair free for him and retired into the embrasure of the window. The room had already cleared and from the back room came the clatter of plates and knives.

—J. Joyce: *Dubliners*, ‘The Dead’

もっとも、‘window-seat’には別の意味もあるのであって、列車などの〈窓側の席〉、あるいは上述に於て触れた様に、一般家屋の室内で、〈窓ぎわに常に置いてある椅子〉などをも指しているのである。次の例が前者のそれである。

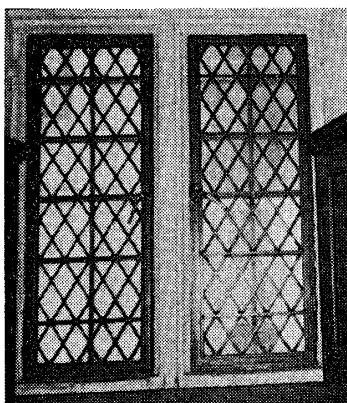
Then the old gentleman in the window-seat looked at me indignantly over his spectacles and said: “Is he going to be sick? Better change places with me, so that you can look after him.”

I am afraid I rather lost my head during the next ten miles.

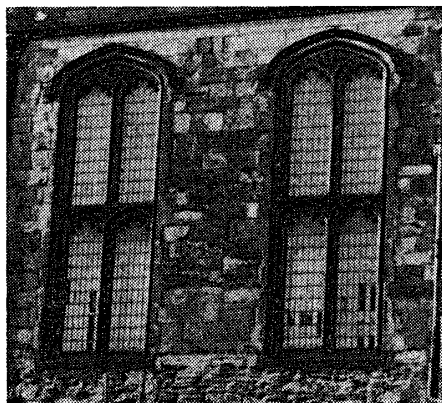
—R. Lynd: *The Sporting Life and Other Trifles*, ‘A Small Boy’s Appetite’

(六) 'diamond-lead-paned window' に関して

一般に木材や金属で棧を格子に組んである窓を、'lattice' あるいは 'lattice window' というが、初期の頃はその棧には 'wicker' (柳の板) や 'rift of oak' (櫛の板材) が用いられ、ガラスは未だ入っていなかったのである。四に於いても触れた様に、'glazed window' (ガラス入りの窓) が普及をみるのはエリザベス朝からであるが、その窓ガラスを嵌めるのに 'came' と呼ばれる鉛製の棧 (lead bar) が用いられると、鉛の柔軟性の故に、強風に堪えるガラス窓を拵えるためには、ガラスは小片にして嵌められねばならなかったが、この造りの窓を指して 'leaded window' といったのである。その際に 'diamond' (菱形) のガラス片を用いたのが 'diamond-lead-paned window' なのであって、その〈菱形〉のガラス片一枚を 'quarry' または 'lozenge' という所から、'window with leaded quarries' とも呼ばれる次第である。ガラスの有無にかかわらず、方形の格子造りの窓の 'square lattice' に対し、こちらは 'diamond lattice' とも簡単にいわれることもあるものである。次の文章では表現が微妙に異なるが、同然の窓を指すことは明白である。



(9) diamond lattice



(10) square lattice

The window was set with thickly-leaded diamond glazing, formed especially in the lower panes, of knotty glass of various shades of green. Nothing was better known to Fancy than the extravagant manner in which these circular knots or eyes distorted everything seen through them from the outside—lifting hats from heads, shoulders from bodies; scattering the spokes of cart-wheels, and bending the straight fir-trunks into semicircles.

—T. Hardy: *Under the Greenwood Tree*

窓は厚い鉛枠のダイヤモンド・ガラスで、特に下の方のそれは緑のさまざまな濃淡の凹凸のガラスでできていた。こうした円いこぶやへこみが、それを通して外から見るとすべての物がゆがんで見える、そのとっぴなことほどファンシーの記憶に残っているものはなかった。——頭から帽子を、体から両肩を持ち上げたり、荷車のスポークをばらばらにしたり、まっすぐな

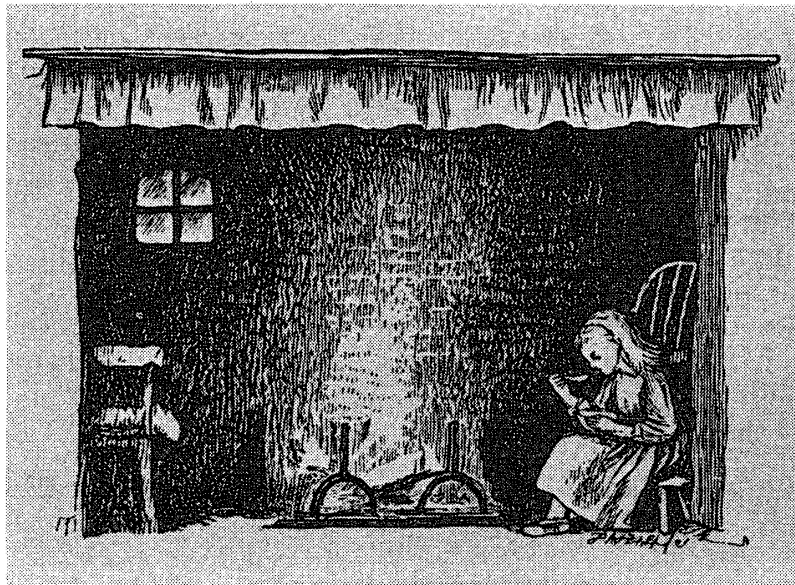
モミの幹が半円形に曲るのだった。

(『緑樹の陰で』千城 昭和55年)

訳者が〈ダイヤモンド・ガラス〉と訳出したのは、‘these circular knots or eyes distorted everything seen through them from the outside’などの内容から判断したためと思われるが、仮にそうでないとした所で、〈それを通して外から見るとすべての物がゆがんで見える〉の日本語の前に置かれるのでは、この訳語は意味を失うであろう。

(七) ‘chimney-window’ に関して

‘fireplace’ (暖炉) の ‘mantelpiece’ (マントルピース) の上部の壁面の構成を指して ‘overmantel’ というが、ここにも様々に装飾が施されたもので、エリザベス朝にはパネルを張ったり、盾形紋章を刻んだり、あるいは、鏡を組み入れたり絵を掛けたり、頂部には ‘pediment’ (ペディメント) を据えることもなされ、ジョージ朝には鏡を二枚以上も取り入れて、高さが部屋の ‘cornice’ (コーニス) まで達するものも見られたが、その ‘overmantel’ には窓のように ‘glazing bar’ (木製の棧) を組み入れた鏡や、あるいは、実際の窓そのものを嵌めて、隣室や室外へ通ずるようにした造りもあったのである。また、‘overmantel’ の箇所とは限らずに、‘chimney-corner’ (炉隅) などを設けることの可能な程の大きな広い拵えの ‘fireplace’ の場合、その奥の壁面には窓が嵌め込まれることもあって、それを指しているのである。引例するに、



(11) chimney-window

“Things so heavy, I suppose,” said Geoffrey, as if reading through the chimney-window from the far end of the vista.

“Ay,” said Nat, looking round the room at points from which furniture had been removed.

—T. Hardy: *Under the Greenwood Tree*

「重かったろう、きっと、」煙突の窓越しに遠くを見つめているように、ジェフリーは言った。
「そうさね。」ナットは、家具の片付けられてしまった部屋のすみずみを見回して言った。

(『緑樹の陰で』千城 昭和55年)

この 'chimney-window' なる語は、同書にて、この家の 'fireplace' の独特の構造に触れた箇所
にても、以下の通り具体的に説明されてあるのである。

These points were common to most chimney-corners of the neighbourhood; but one feature there was which made Geoffrey's fireside not only an object of interest to casual aristocratic visitors—to whom every cottage fireside was more or less a curiosity—but the admiration of friends who were accustomed to fireplaces of the ordinary hamlet model. This peculiarity was a little window in the chimney-back, almost over the fire, around which the smoke crept caressingly when it left the perpendicular course.

—*Ibid*

従って、この 'chimney-window' の 'chimney' とは、所謂〈煙突〉の方の意味ではなく、
'fireplace' の方を指す語なのであって、〈暖炉窓〉、乃至は〈炉窓〉とも訳すべきものである。
〈煙突の窓〉——〈煙突〉に〈窓〉などは通例考えられぬことと思われるが——などからはそもそも
も外景は見ることは不可能であろう。

後 記

本論は元より翻訳上の誤りをあげつらうことに目的があるのではなく——そのためもあって訳
者名は敢えて省いてあるが——日英の風土・文化の違いに帰因する誤解・誤読が依然として想像
以上に見受けられ、所謂〈英語辞典〉類のみでは仲々以って解決されぬ面が少なくないため、我
国に於けるその分野の研究の一層の発展の必要を唱えるべく、広範囲の中から〈建築の領域〉、
しかもそのまた〈窓〉に関して、幾多の内から七種を取り上げた次第で、翻訳書の方も入手可能
な限り発行年代の新しいものを選んだが、中には今日では絶版になっていて、以後新訳の出ない
作品もあるなどの点も記して置きたい。また、本学の学生37名を対象に、日本語による〈長
い窓〉の文字から連想される窓の形態を図示させた所、内31名が〈横長の窓〉、6名が〈縦長の
窓〉を描き、しかも、そのアンケートによって、前者の場合は〈横〉対〈縦〉の比率が〈4〉対
〈1〉にもなる程の〈横長の窓〉を思い浮かべているという結果が出たことも付記して置きたい。
なお、掲載した写真・図版に関しては次の通りである。

- 写真 (1)(3)(5)筆者, (2)関 典明氏, (6)小谷野恵子氏, (9)横山かおる氏, (10)岩佐弘志氏
- 図版 (4) *Traditional Buildings of Britain*, by R. W. Brunskill, Victor Gollancz Ltd., London, 1988.
- (7) *A History of Everyday Things in England* vol. I., by Marjorie and C. H. B. Quennell, B.T. Batsford Ltd., London, 1931.
- (8) *The Home in Britain*, by James Ayres, Faber & Faber, London, 1981.
- (11) 『復刻世界の絵本館——オズボーン・コレクション』の中の *SING-SONG*, by Christina G. Rossetti; illustrated by Arthur Hughes, ほるぷ出版社, 東京, 1980.